Jour. Agri. Sci., Tokyo Univ. of Agric., 46 (3), 154-165 (2001)
東京農大農学集報，46（3），154-165（2001）

先駆的事例を通じた我が国における オープンガーデンの意義

相田　明*・進士五十八**

（平成13年2月28日受付/平成13年7月19日受理）

要約：「私的な空間である庭園の公共性」つまり，個人庭園を多くの市民が楽しみ，喜びを分かちあうという意味での公共性が議論される現代，「庭園」の持つ意味が歴史的な転換期を迎えている。ガーデニング・ブームにより，イングランドとウェールズにおいて活動しているナショナル・ガーデン・スキームによるオープンガーデンに関心が高まり，我が国でも11のオープンガーデン団体が形成されている。本報は，ガーデニング・ブーム以前よりオープンガーデンを開催し，大都市圏に位置した3つの庭園を先駆的事例として選び，それらを通じて我が国におけるオープンガーデンの意義と今後発展するであろうオープンガーデン運動の方向性を考察することを目的とした。研究対象は神奈川県横浜市の川口邸庭園（公開31年間），東京都国分寺市の渡辺邸庭園（公開17年間），大阪府大阪市の河合邸庭園（公開8年間）である。先駆的事例の考察の結果，オープンガーデンという市民の自主的な活動により，我が国においても私的な空間である個人庭園の公共的展開が可能であることを示唆していた。オープンガーデンは今後の発展によって，新たなアメニティ創出の計画的メニューのひとつとも位置づけられよう。

キーワード：オープンガーデン，ナショナル・ガーデン・スキーム，個人庭園，ガーデニング・ブーム，地域計画

1. はじめに

現代において個人庭園という私的な空間と，公的な空間との境界線は不明瞭になりつつあるといえる。2000年9月，岡山で開催された「第3回日・中・韓　国際ランドスケープ専門家会議2000」では「私的な空間である庭園の公共（パブリック）性」について多く議論がされた。鈴木（2000）は「庭園を個人の閉ざされた楽園と考える時代は終わった。…我々の庭園に対する概念を個人所有のものから，また閉ざされた庭園から解き放ち，より広い概念へと変革すべきであろう」と考え，個人庭園，コミュニティー・ガーデン，ストリート・ガーデン，パブリック・ガーデン，アーバン・ガーデンまでの広がりを「テリトリアル・ガーデン」という言葉で説明し，トップ・ダウン（演繹）的な都市計画ではなく，ボトム・アップ（帰納）的に個人の庭園に対する感覚を重視するような都市計画を提唱している[1]。佐々木（2000）は「庭から敷地主義の壁を取り払い，周辺環境とつなげること」で，コモン・スペースを形成，それによって始めて，21世紀の人間都市が創造されるという[2]。桑子（2000）は私的な空間である個人庭園が形成する景観は，「公的な空間のなかへ進入し，あるいはその重要な一部をなしている」として，私的な空間が公共性を帯びていることを「境界的空間」という言葉で表現している。その上で私的な空間の持つ多様性が公共空間に反映されるためには，住民参加が必要であり，それにより画一的でない，豊かで個性的な景観が達成されるという[3]。野中（2000）はガーデニング・ブームの現代的意義を説明した上で，「個人の庭を開放し，庭を通じて来訪者と住民との交流をする『オープンガーデン』という仕組み」は，地域に交流という循環が生まれるとしている。そしてこのようにガーデニングの活動が発展すれば「都市環境の維持・管理を市民が主体的に担う役割を受け持つ可能性をもつ」と結論づけている[4]。

4人の論者は言葉の違いがあるにせよ，個人庭園という私的で閉鎖的空間が，公的で開放的になることにより，都市における今後の環境・景観の向上に寄与する可能性を示唆している。「庭園」の語源を考えてみると，「庭」は門から建物までの空間で建物前の舗装され囲まれている場所，「園」は果実のなる樹木が，柵で囲まれた土地の中に植栽されている場所である。また英語のガーデン（garden）の語源は，ヘブライ語の囲まれた（gan）と，楽しみ・喜び（eden＝エデンの園）の場所である[5]。どちらにしても庭園の持つ意味は「囲まれ」安全で美しく快適な場所であることには変わりない。「私的な空間である庭園の公共性」つまり，個人庭園を多くの市民が楽しみ，喜びを分かちあうという意味での公共性が議論される現代，「庭園」の持つ意味が歴史的な転換期を迎えているといえよう。

その一方で住宅地の狭小化が進行，特に都市の既成の住

* 東京農業大学大学院農学研究科農学専攻
** 東京農業大学地域環境科学部造園科学科

宅地では，相続税などの問題により土地の細分化が起こり，個人庭園は消失，または著しく減少している。集合住宅でも同様に，土地利用の高密度，過密化により住民の「庭園」であるはずのオープンスペースが狭小化している。都市では個人「庭園」の代替的な緑地として公園が造成されてきたが，行政の財政難といった現代的状況において，かつてみられたような新規の創出は困難であろう。そこで私的である個人庭園が「公共性」をもつことにより，現在より充実した「緑地生活」実現の可能性がある。

2.　本報の位置づけ

本報で扱うオープンガーデンは「情報が周知されていることにより一般市民が入り込み観賞することができる個人庭園」のことである[6]。市民が「個人庭園」という私的な空間を訪問することにより，公的な空間と認識する。そしてオープンガーデンでは「個人庭園」を所有し，管理する「庭園主」は，「来訪者」とガーデニングの情報交換といった交流をし，「来訪者」は「個人庭園」をまちなみとして景観認識する。これらオープンガーデンの基本となる 3 要素とそれらの関係により，オープンガーデンが成立しているのである（図 1）。

我が国におけるオープンガーデンの歴史は，江戸時代において大名の私園（個人庭園）を江戸市民へ開放したことに始まると考えられる。小石川後楽園について佐藤（1977）は「わが国で藩主がその庭園を開放して一般市民に遊観せしめた最初のものは，江戸小石川の水戸藩邸の後楽園であると思われる」とし，公園の前身として位置づけている。その時期は，徳川光圀による改修が寛文以降（1667 年～）であることから，寛文中期から元禄末期（1668～1700 年）頃であったという[7]。また小野（2000）は六義園の「庭見物」について述べ，柳沢信鴻『宴遊日記』をもとに，一般的に江戸の大名屋敷は外部に対し閉鎖的な空間構造である一方，「願い」があれば「庭見物」が可能であったという。六義園では藩士，出入りの町人，庭師といった仲介者を通じて，家臣や奉公人またそれらの家族，信鴻と交友関係にあるものだけでなく，幕府の役人や他藩の武士またそれらの家族や町人，農民の来訪が，安永 9（1780）年以降から著しく激増したという[8]。

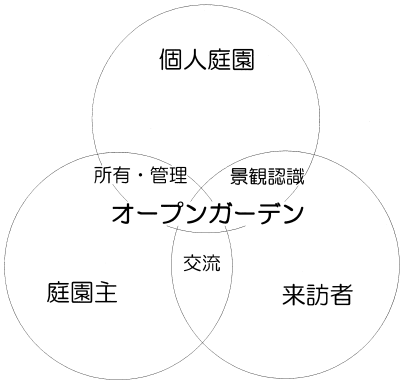

図 1　「個人庭園」「庭園主」「来訪者」によるオープンガーデンの成立

しかしながら我が国の現代におけるオープンガーデンの流行は，英国から移入されたことに始まる。ガーデニング・ブームにより，海外，特に英国の庭園や園芸の情報量が格段に増加し，庭づくりに係わる植物材料やガーデン・デザインだけではなく，次第に造り育てた庭を活用して社会に貢献するナショナル・ガーデン・スキーム（The National Gardens Scheme Charitable Trust）といったオープンガーデンの活動も書籍，雑誌などで紹介されるようになった[9,10]。イングランドとウェールズにおいて活動しているナショナル・ガーデン・スキームはオープンガーデンを組織的に展開している団体として知られており，1927（昭和 2）年に設立，個人庭園を中心に 3,700 以上の庭園を，年に数日間公開し，入場料や茶菓提供などの収益金を主に看護婦養成，医療福祉活動やナショナル・トラストなどの団体に寄付（約 2 億 7,000 万円，2000 年度）をしている。その案内書，通称『イエローブック』によると，単独で公開する庭園（2,438 庭園）と，いくつかの庭園が集まりグループとして公開する庭園群（257 庭園群）の 2 種類があり，年間の延べ総開園数は 5,852 日，1 庭園あたり 2.17 回の公開をおこなっている[11]。

こうした背景の下，我が国においてもオープンガーデンを開催する市民が着実に増えつつあり，1997（平成 9）年より 11 の団体が結成されている（表 1）[12]。ナショナル・ガーデン・スキームと我が国の 11 団体との活動を比較すると，前者は誰でも登録した庭園を訪問できる一般公開制のみであり，後者は一般公開制に加え，会員となってその会に所属する庭園を訪問する会員公開制の 2 種類であるという相違点がある。またナショナル・ガーデン・スキームは，看護婦に対する養老年金基金へ寄付するため開始した社会福祉活動（チャリティー）としてのオープンガーデンであるが，我が国の場合，ガーデニングにより個人庭園から，環境・景観の質的向上を目指した市民活動としてのオープンガーデンが基となっているという相違点がある。

3. 研 究 目 的

ナショナル・ガーデン・スキームの影響を強く受けたオープンガーデン開催団体に対し，それよりも早くから一般に公開された個人庭園がある。本報では 3 つの庭園を先駆的事例として選び，その公開の実態を精査することにより，我が国におけるオープンガーデンの意義と今後発展するであろうオープンガーデンの方向性を考察することを目的とした。

4.　研究対象と方法

研究対象としたのは，住宅地の狭小化，細分化が進行する大都市圏に位置し，1996（平成 8）年から始まったとされるガーデニング・ブーム以前よりオープンガーデンを開催している神奈川県横浜市の川口邸庭園，東京都国分寺市の渡辺邸庭園，大阪府大阪市の河合邸庭園の 3 つである（表 2）。これらの庭園の概要，オープンガーデンの経緯，公開方法を資料並びにヒアリング調査の結果から整理，考察し

表 1　日本におけるオープンガーデン実施団体の活動（2000 年 12 月）

	団体名	事務局所在地	設立年次	オープンガーデンの開始	会員数	公開庭園数
一般公開制	伊豆オープンガーデン	静岡県伊東市	1998年2月	1999年1月	－	23
	小布施オープンガーデン	長野県小布施町	2000年5月	2000年5月	－	38
	すま花ネット	兵庫県神戸市須磨区	2000年8月	2000年10月	－	21（＋8市民花壇）
	イエローブック岡山	岡山県岡山市	1999年1月	1999年5月	－	54
会員制	オープンガーデンいわて	岩手県岩手郡滝沢村	1999年4月	1997年7月	120	16
	オープンガーデンみやぎ	宮城県仙台市	1998年9月	1998年6月	124	20(春20、秋13)
	オープンガーデンいわき	福島県いわき市	1999年2月	1999年5月	127	26(春17、秋16)
	オープンガーデンクラブ東京	東京都新宿区	2000年1月	2000年5月	(90参加者)	7
	伊豆コテージガーデンクラブ	静岡県伊東市	1998年2月	2000年5月	37	10
	お庭の公開日をつくろうの会	静岡県浜松市	1997年4月	2000年3月	40	12
	チェルシー・クラブ	大分県大分市	1998年2月	1998年4月	103	19(春10、秋9)

表 2　我が国におけるオープンガーデン開催の先駆的事例

庭園名	川口邸庭園	渡辺邸庭園	河合邸庭園
所在地	神奈川県横浜市	東京都国分寺市	大阪府大阪市
公開歴	31年間(1970年～)	17年間(1984年～)	8年間(1994年～)
開催日	6月	5月	5月
開園日数	1ヶ月間	1日間	3日間
開閉園時間	午前9時から午後5時	午前10時から午後3時	午後1時30分から午後4時30分
庭園面積	6,000㎡(住宅面積を含む)	150㎡	100㎡
見どころ	アジサイ	バラ	バラ
公開のきっかけ	みどりを要求する一般市民のため	老人会の要望	老人会の要望
告知方法	邸宅門に看板	町内にチラシ、ポスターを配布、掲示	邸宅門に張り紙
喫茶の提供	麦茶(無料)、和菓子(有料)を提供することもある	紅茶・ケーキを提供(無料)	老人会のみ茶菓を提供(無料)
近隣への緑化影響	区の花に選定	“6丁目「緑のお散歩マップ」”作成	10軒の「フラワーロード」を形成
誘致距離	市内が中心、近県	町内が中心、市内、近県	町内が中心、市内、近県
公開の問題点	植物への被害、訪問者の態度、時間の厳守、電話での対応	特になし	特になし

た。なお渡辺邸庭園への来訪者の属性，発地については，整理された資料があったため，「6．東京都国分寺市の渡辺邸庭園における来訪者の属性と誘致距離の変化」で考察をおこなった。

5．我が国におけるオープンガーデン開催の先駆的事例

5-1　神奈川県横浜市の川口邸庭園におけるオープンガーデン

5-1-1　庭園の概要

川口邸庭園は神奈川県横浜市のスプロール化が進む住宅地に位置し，現在でも畑地が残存している（図 2）（写真 1）。白鳳庵と名づけられた庭園は，アジサイの咲く名所として近隣住民に知られ，宅地及び庭園を含め面積約 6,000 m²，ケヤキ，モチノキといった樹齢 200 年を超える老樹・大樹を含む樹林下に，約 80 種類，5,000 株以上のアジサイが植栽されている。明治時代に庭園が造られ，敷地にあった生糸製糸工場が廃業した 1919（大正 8）年以降，徐々に建築物が撤去され，庭園の一部となっている。昭和 30 年ごろまで敷地内を流れる大門川から水を引き，池泉を形成していたが，現在では治水工事による河床の低下や水質の悪化により水を引き入れていないため，枯池となっている。邸宅の門は大正時代に移築した明治期の神奈川県庁の門であり，史跡として訪れる市民も少なくない[13,14]。

5-1-2　オープンガーデンの経緯

川口氏は近隣地域の人口増加や土地価格の上昇という社会的状況から，この敷地でマンションを建設しようと考えた。しかし，市民の緑への要求も年々に増加していることから，川口氏は庭園内の大樹・老樹が貴重であると考え，保存する方針にした。1964（昭和 39）年春，樹林下の雑草の成長をおさえると同時に，市民から歓迎される花木で，管理・栽培が容易なアジサイが選ばれ，植栽された[13]。当初からオープンガーデンを考えていたようであり『卒寿を記念して』には「みどりを要求する世の人のために…一般

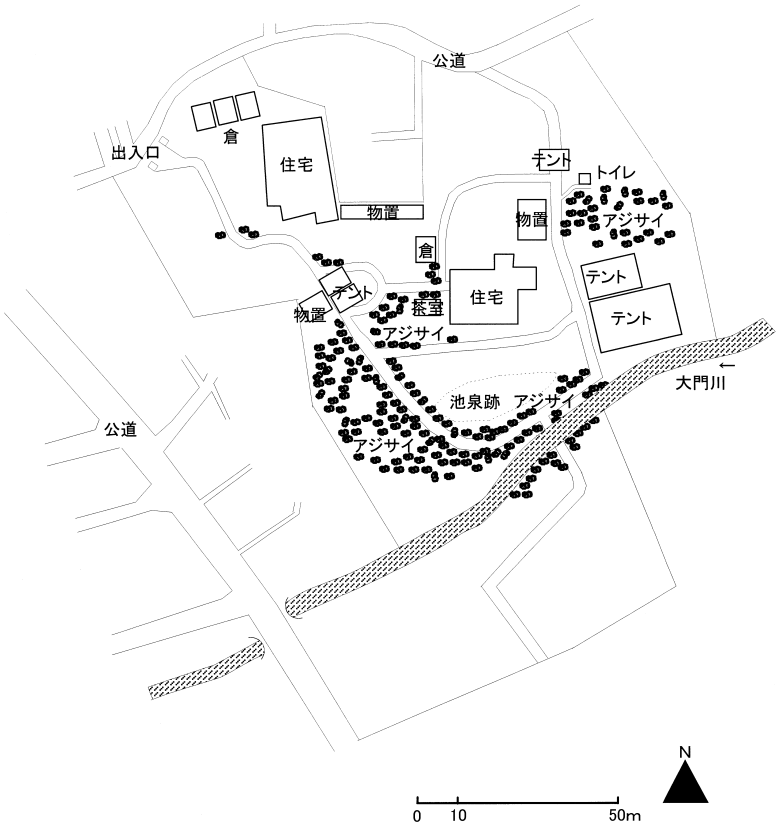

図 2　神奈川県横浜市の川口邸庭園平面図（オープンガーデン開催時）

写真 1　神奈川県横浜市の川口邸庭園（2001 年 6 月 20 日）

市民のため開放すれば」[13]，『白鳳と紫陽花と横浜文化賞』には「元来が開放するつもり」[15] という記述がある。オープンガーデンの開催の理由についても「これを一人で満喫するには忍びず，世間の人々にもという気持ちから」[16] と公共的な思想が感じ取れる。

1970（昭和 45）年よりオープンガーデンを開始し，現在まで 31 年間継続している。1971（昭和 46）年頃，昼間のテレビ番組（NHK）にてオープンガーデンの模様が放映され，個人庭園でありながら，アジサイの名所である「鎌倉の明月院と比較できるほど素晴しい」と評価された。また「あじさい祭」と称して，市議会議員であった庭園主の関係者を招待したガーデン・パーティーを開催し始めたのもこの時期である。

白鳳庵の影響として，「区内に多く見られ，栽培が簡単で誰にでも愛され，親しまれる花を」ということで区の花を募集した結果，瀬谷区の土壌に適し，市内隋一の名所である本庭園があることから，1984（昭和 59）年 10 月にアジサイが「瀬谷区の花」に選ばれている[17]。

オープンガーデンの紹介報道として新聞，ミニコミ誌，テレビなどがあり[18]，横浜市の広報誌では花の名所，梅雨の風景として本園を取りあげている[19]。1978（昭和 53）年，瀬谷区市民課社会教育係発行「瀬谷区の歴史地図」の「コースガイド【北】」や，1997（平成 9）年，横浜市瀬谷区発行「瀬谷区まちなみ景観マップ」の「鎌倉古道ルート（北地区）」のコース内に白鳳庵が記載されており，また最近の住宅地図[20] には「あじさいの里白鳳庵」と明記されていることから景観資産として地域に十分認識されている。

5-1-3　公開方法

アジサイの開花時期である 6 月中，午前 9 時から午後 5 時までほぼ毎日，無料で公開しているが，それ以外の時期でも，開門中訪問する市民もいる。告知方法として，邸宅門に「あじさいの里白鳳庵」の看板を掲げている。最寄の相鉄線瀬谷駅では白鳳庵までの行き方を尋ねられるため，開花時期になると案内図を掲示している。

庭園にはアジサイの開花期のみ，ガーデン・パーティー用のテントが設営されている。オープンガーデン時にも一部の椅子，机が並べられているため，来訪者は弁当を食べ

るときに利用をしている。机の上にセルフ・サービスの無料の麦茶が置かれることもあり，来訪者を喜ばせている。最盛期には近隣の和菓子屋が，アジサイを模った和菓子を販売している。オープンガーデンを開始した時にNHKテレビにて放映されたため，当時から来訪者数は多く，神奈川県，東京都，関東圏から訪問している。来訪者は1日100～200人，開花最盛期には700～800から1,000人を越えるほどで年間2～3万人，駅から列ができる程多いという。「幸い今日では横浜を始め近隣の都市は勿論東京都からも多く人々がわざわざ観賞に来て」や「市内はもちろん，県内各地や東京方面の女性グループが訪れるほど有名になった」[21]ということから，30年間の間，少しずつだが来訪者の誘致距離は拡大しているものと推測される。

オープンガーデン開催の問題点として，アジサイの花，枝を折られる被害，公園を利用しているかのような態度，閉園時間を守らない，オープンガーデンに関する電話への対応などが挙がった。トイレの使用については，庭園内に設置されているため，オープンガーデン開催団体ほど問題となっていない[12]。

5-2　東京都国分寺市の渡辺邸庭園におけるオープンガーデン

5-2-1　庭園の概要

渡辺邸庭園は東京都国分寺市の昭和30年ごろから開発された住宅地に位置し，現在でも武蔵野の面影を残す雑木林や畑地がある。近隣では「バラの庭」として知られており，庭園は外構部分を含め面積150 m^2，南側が公道（幅3.6 m，現在は幅4 m），東側が私道（幅1.8 m）に接した角地で，西側にはアパートがある（図3）（写真2）。南，東の道路側には高さ1.6 mの格子状のフェンスが設置され，生垣のようにバラ，ツルバラを誘引，現在，合計約80本植栽されている。バラ以外の主な樹木として高さ6 mのアカマツ（1本），4 mのシラカバ（3本），またそれらの樹林下にクリスマスローズなどが植栽されている。庭園の中央には，フェスキューを中心とした西洋芝があり，周辺部分にはジキタリス，カモミールなどが自然風に植栽されている。

5-2-2　オープンガーデンの経緯

1957（昭和32）年に家屋を建築したが，転勤などもあり，再び居住し始めたのは1977（昭和52）年からである（表3）。この年からバラの植栽を開始，1978（昭和53）年ごろバラ用フェンスが設置されて，現在の「バラの庭」が整えられた。フェンスの設置以降，バラの開花期には道路から地域住民が眺めており，中には声をかけ，そして庭園に入る住民もあった。東恋ヶ窪六丁目の老人会（北原厚生会，「北原」はかつての地名）から訪問をしたいという要望があり，また受け付けや来訪者接待の手伝いを無償援助する地域住民が現われたことにより，1984（昭和59）年，第1回「バラを愛する会」を開催，以降17年間続いている。なお第1回から第5回（1988年）までは老人会の日程に合わせていたため，日曜日の開催ではなかった。

第6回（1989年）から，それまで「バラを愛する会」と呼んでいたものを「バラを楽しむ会」に変更，その時から

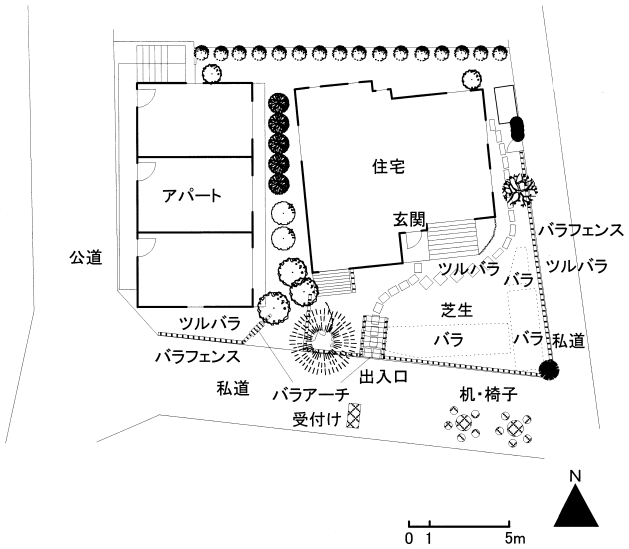

図3　東京都国分寺市の渡辺邸庭園平面図（オープンガーデン開催時）

写真2　東京都国分寺市の渡辺邸庭園（1999年5月23日，渡辺氏所蔵）

チラシ，ポスターを作成している。また同年から「さつき鑑賞会」のように同町内の他邸で庭園や盆栽などの訪問を同時開催するなど，オープンガーデンの地域への波及効果がみられた。

一般に「オープンガーデン」という言葉はガーデニング・ブーム以降知られるようになったが，ヒアリングにおいて「当初から使っていた」といい，1987（昭和62）年6月7日のメモには「…来年オープンガーデン知らせる…」と書かれている記述があった。

1991（平成3）年度，渡辺氏は町内会の理事を務めた。その際，花や緑が増えるよう“6丁目「緑のお散歩マップ」”（図4）を渡辺氏は提案し，町内会で決定した後，1992（平成4）年2月に完成した。マップは，町内会（自治会）に加入している420世帯（現在は550世帯）に配布された。B4判，カラー刷りのマップは，生垣，花木，草花などが観賞できる32軒の町内会員宅の所在地，開花時期などが明記されている。町内会の人々はマップについて，「六丁目に花が増えた」「散歩するのが楽しくなった」[22]といった感想を

表 3　東京都国分寺市の渡辺邸庭園オープンガーデン年表

【オープンガーデン開始以前】	
1957(昭和32)年	家屋を建築
1977(昭和52)年	転勤先から帰り、再び居住開始
1978(昭和53)年	庭園の改造(鉄鋼製フェンスの設置)
【オープンガーデン開始】	
1984(昭和59)年6月4日(月)	【第1回】バラを愛する会開催
1985(昭和60)年5月20日(月)	【第2回】バラを愛する会開催
1986(昭和61)年5月24日(土)	【第3回】バラを愛する会開催
1986(昭和61)年5月29日	読売新聞(多摩版)、「50種類のバラ開花」
1987(昭和62)年5月25日(月)	【第4回】バラを愛する会開催
1987(昭和62)年6月1日	サークルマム (Vol.41)、「国分寺散歩⑫　東恋ヶ窪6丁目の“ローズパーティー”」(住通・株式会社グリーンボックス)
1988(昭和63)年5月25日(水)	【第5回】バラを愛する会開催
1988(昭和63)年6月1日	国分寺市報(No.608)、「バラの香りにつつまれて…」
1988(昭和63)年6月10日	産経新聞(多摩版)、「夢がかなったバラのトンネル」
1989(平成元)年5月14日(日)	【第6回】バラを楽しむ会、さつき鑑賞会(松本邸)同時開催
1989(平成元)年9月1日	国分寺市報(No.638)、「すがすがしい生垣を見ると住む人の優しい心が伝わってくる」
1990(平成2)年5月20日(日)	【第7回】バラを楽しむ会、生垣とお庭(岡田邸)、山草・野草の盆栽(市川邸)同時開催、茶菓の提供開始明記
1991(平成3)年5月19日(日)	【第8回】バラを楽しむ会、山草・野草の盆栽(市川邸)同時開催
1992(平成4)年2月	“6丁目「緑のお散歩マップ」”配布
1992(平成4)年5月17日(日)	【第9回】バラを楽しむ会開催
1993(平成5)年5月23日(日)	【第10回】バラを楽しむ開催
1993(平成5)年6月15日	国分寺市報(No.729)、「花のある街はすてきな町　“10年を迎えたバラを楽しむ会”」
1994(平成6)年5月22日(日)	【第11回】バラを楽しむ会
1994(平成6)年5月22日	東京新聞(多摩版)、「大好評『緑のお散歩』マップ　イラスト入れで紹介」
1995(平成7)年5月21日(日)	【第12回】バラを楽しむ会、蝸牛洞(小さな美術館・吉田宅)同時開催
1996(平成8)年5月26日(日)	【第13回】バラを楽しむ会、蝸牛洞(小さな美術館・吉田宅)同時開催、茶菓をケーキと紅茶に変更
1996(平成8)年6月15日	国分寺市報(No.801)、「MXテレビ『ひと・ゆめ・40』」(国分寺市企画番組)
1996(平成8)年6月29日	MXテレビ、「ひと・ゆめ・40」(国分寺市企画番組)
1996(平成8)年6月29日	アサヒタウンズ(多摩版)、合津裕子「バラを楽しむ会」
1997(平成9)年5月25日(日)	【第14回】バラを楽しむ会、コンテナガーデン(八木原邸・国年邸)同時開催
1997(平成9)年9月	家庭画報(第475号)、「朝露に光るバラはダイヤモンドより素敵」(世界文化社)
1997(平成9)年11月	小さなフラワーガーデン、「バラめぐりの旅で自覚した『私らしい庭』」(世界文化社)
1998(平成10)年5月15日	地域情報誌ここ(第14号)、「第15回バラを楽しむ会—花とアートへのおさそい—」(東京新聞国分寺北部専売所)
1998(平成10)年5月24日(日)	【第15回】バラを楽しむ会、コンテナガーデン(八木原邸・国年邸)、さつき盆栽(松本邸)同時開催
1998(平成10)年10月	シニア・スクエア(Vol. 27)、「いきいき達人花のある暮らし」(多摩情報メディア)
1999(平成11)年4月	新しい日本のガーデニング　健やかな庭、「全国オープンガーデン情報」(プレジデント社)
1999(平成11)年5月23日(日)	【第16回】バラを楽しむ会、コンテナガーデン(国年邸)、さつき盆栽(松本邸)、蝸牛洞(小さな美術館・吉田宅)同時開催
1999(平成11)年11月	NHK趣味の園芸(No.320)、「ガーデン探訪一般公開も大好評　香り豊かなローズガーデン」(日本放送出版協会)
2000(平成12)年5月21日(日)	【第17回】バラを楽しむ会、さつき盆栽(松本邸)、山野草(古屋邸)同時開催
2000(平成12)年6月	ビズ(No.6)、「ガーデンサークル」(プレジデント社)
2001(平成13)年1月	道路拡張のためバラフェンスの後退工事

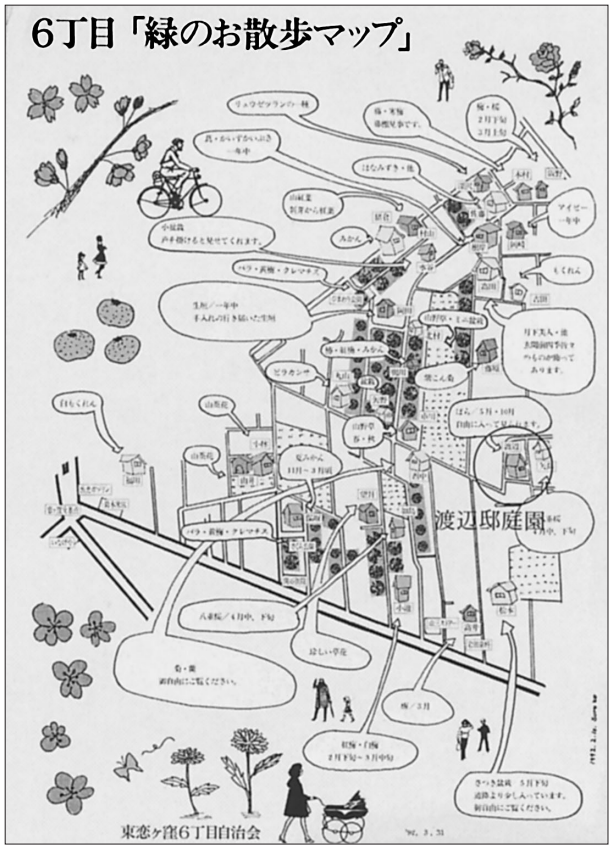

図 4　東京都国分寺市の渡辺邸庭園と“6丁目「緑のお散歩マップ」”（○印が渡辺邸庭園）

語っている。マップ作成以前の新聞・雑誌等の記事は「近所の人の目を楽しませている」[23] のようにバラの開花という歳時記的なものとして扱っており，バラを楽しむ会やオープンガーデンの活動について直接記事になっているものはなかった。マップ作成後「花と緑に出会う街」という標語も作られ，オープンガーデンの効果が町内全体に影響を及ぼすようになる。

ガーデニング・ブームが始まったとされる 1996（平成 8）年の第 13 回目，今まで茶菓は，日本茶，和菓子の提供であったが，若い世代の支援者の発案によりその内容が紅茶とケーキへ変更した。第 14～16 回（1997～1999 年）のオープンガーデン時，当時流行していたコンテナガーデンを同時に訪問する企画が始まった。渡辺邸庭園の記事は今まで新聞の地方版，市広報に掲載されていたが，ガーデニング・ブームの影響により，1997（平成 9）年，『家庭画報』のような全国版雑誌の記事（合計 5 雑誌）に取りあげられるまでになった。

オープンガーデン開始時の 2～3 年目は 8 人程度であった茶菓提供の手伝い，受け付けも，30 代の支援者が組織に加入するなどして，現在では 15 名程度に増加した。新規加入者の子供（小学生）や友人も訪問するようになり，世代に多様性がみられるようになった。

2000（平成 12）年 12 月から道路拡幅工事のためバラ用フェンスのセットバック工事が始まり，つるバラを移植した。そのため 2001（平成 13）年のオープンガーデンは，バ

ラの枝葉の発達が十分でないことから中止となった。

5-2-3　公開方法

現在では5月中旬から下旬にかけての日曜日に，1日のみ，無料で公開をしている。開催時間は午前10時から午後3時までであり，これはオープンガーデン開始時から17年間変化していない。チラシ（A5判），ポスター（A3判）をオープンガーデンの1週間前に，町内に配布，掲示をすることにより案内としている。

茶菓についてもオープンガーデン開始当時から無料である。庭園内に来訪者用の机，椅子を設置する十分な空間がないため，庭園南側の私道上のバラ用フェンス側に机，椅子を出し，来訪者に提供している（図3）。ナショナル・ガーデン・スキームでは入場料や茶菓を提供しチャリティーとして寄付している。渡辺邸庭園の支援者へのヒアリングでは，「阪神・淡路大震災の際，募金箱を設置してはどうかという意見があった」が，「寄付行為がバラを鑑賞するための義務になる恐れがある」「町内会や地域センターなどにも募金箱がある」との理由で寄付はおこなわれなかった。

オープンガーデンの開催団体では，オープンガーデン開催の問題点のひとつとして「近隣住民からの苦情」を挙げている。しかし，この庭園のオープンガーデンでは事前に町内へ開催日をチラシ，ポスターによって告知し，周辺住民への挨拶（5軒程度）をしており，また町内会としても椅子を貸し出すなどオープンガーデンを支援しているため，近隣住民からの苦情はない。

5-3　大阪府大阪市の河合邸庭園におけるオープンガーデン

5-3-1　庭園の概要

河合邸庭園は大阪府大阪市の閑静な住宅地に位置する。近隣の10軒程度の住宅は，「花好きの家庭が多く」庭園や玄関前にコンテナや大きな平鉢を置くなどして，四季を通じて花で飾っている。町内外の住民はこの道路を「フラワーロード」と呼び，格好の散歩コースにしている。庭園は面積100 m^2，南面が道路（幅4 m）に接し，20年以上の間，多種多様なバラを植栽している（図5）（写真3）。入り口からカーポートまでの進入路は，自動車の出入りに支障がないような矮性の草花花壇である。庭園の中央は芝生地であり，壁面の2 m程度のフェンスには，つるバラやつる性のオールドローズが誘引されており，原種，オールドローズ，モダンローズからイングリッシュローズといった種類や，つる性からシュラブタイプといった性質のバラが植栽されている。

5-3-2　オープンガーデンの経緯

以前からオープンガーデンを開催することを模索していたが1994（平成6）年，河合氏の会社退職を機に地域の老人会「晴樹会」へ庭園を公開することにした。同時に「地域の人々にも日頃のご恩返しの意味をかねて」年に2回の一般公開も開始した。

5-3-3　公開方法

その年の天候によって4月下旬に公開日を決定し，5月中・下旬に無料公開する。老人会の公開日は平日の1日，一般公開は土・日曜日のいずれか1日と平日の1日の合計2日間である。開園時間は午後1時30分から午後4時30分まで，2000（平成12）年から試験的に午前中公開しているという。現在，老人会に対しては，茶菓を無料で提供している。

告知方法はオープンガーデンとその日時を記した張り紙を，邸宅の門に掲示するのみである。したがってオープンガーデンの情報の広がりは地域住民の口コミなどが主である。

天候にもよるが来訪者数は一日平均80～120名，毎年合

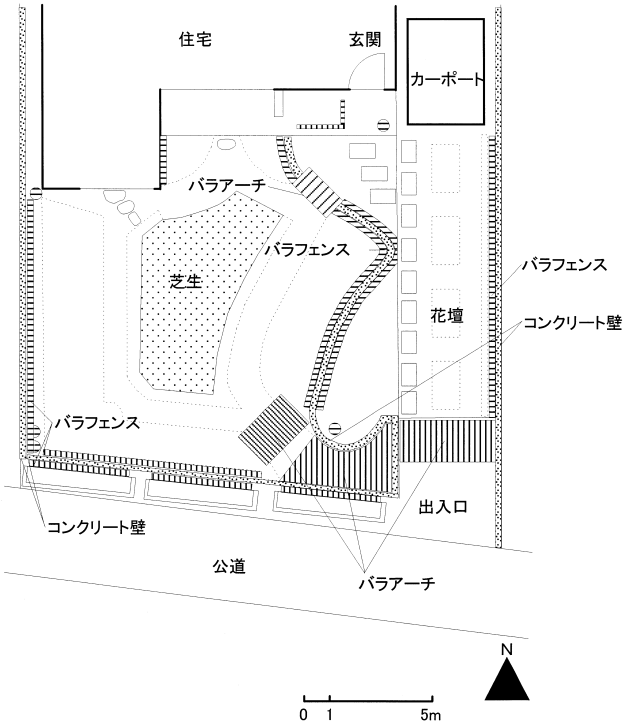

図5　大阪府大阪市の河合邸庭園平面図（オープンガーデン開催時）

写真3　大阪府大阪市の河合邸庭園（2001年5月17日，撮影・山内美陽子）

計 300 名程度であり，オープンガーデン開始から大きな変化はない。河合氏によれば来訪者は「新規 30%，リピーター 70% 前後」であり，その誘致距離は地域住民が中心であるが，「京阪神地域の他，奈良，滋賀，和歌山など」近県にまで拡大しているという。

来訪者は公開時間を厳守しており，地域住民は混み具合を見計らって訪問するため，庭園内が混雑することはない。禁止していない写真撮影や，芝生への立ち入りに関して，来訪者は庭園主の許可を求めるという。庭園主はこのようにマナーがよい原因について「報道機関などにオープンガーデンの日時を告知せず，邸宅の前に掲示を見た近隣住民とその知人のみが来訪しているため」であると考えている。

6.　東京都国分寺市の渡辺邸庭園における来訪者の属性と誘致距離の変化

6-1　分析方法

今後のオープンガーデンの展開に大切な資料となる来訪者の数，性別，年齢，発地，目的などのうち，渡辺邸庭園については数，性別，発地についての資料が得られたため分析考察することにした。1984（昭和 59）年から 2000（平成 12）年まで 17 年間のオープンガーデンの来訪者名簿が保管されていることから，氏名から男女別の来訪者数を整理し，住所から来訪者の誘致距離を整理した。来訪者の誘致距離分布は，最も渡辺邸から近い来訪者から順に遠くに向かって住所をプロットし，来訪者数が 80% に相当する地点までを半径とする円を描き，その直線距離を把握する方法とした。

6-2　分析結果

⑴　来訪者の性別：男女比はおよそ 3 対 7 で女性のほうが多く，年によって大きな違いはない（図 6）。

⑵　来訪者数：17 年間の来訪者数はのべ 2,095 名，第 1 回の 1984（昭和 59）年は合計 64 名で，徐々に増加し，最大の来訪者数となった第 16 回の 1999（平成 11）年には 212 名と開始時の 3 倍以上となった（図 6）（図 7）。第 4 回の 1987（昭和 62）年は例年と比較し減少している理由として「（渡辺氏の仕事であった）教職とバラの団体の社会活動が多忙で，当時はチラシ・ポスターなどなく，口コミで情報を知らせていた」ため住民への告知が十分でなかった。第 17 回の 2000（平成 12）年における来訪者の減少については，「昨年に比べ来訪者は 30～40 名少なかった。前日の雨天のせいかもしれない」とバラを楽しむ会「反省事項」メモに書かれている。

⑶　来訪者の発地：来訪者がどこから来ているのかを年毎に調査した。その指標として，庭園が人々を誘致すると考え，誘致距離の概念を適用した（図 6）。また誘致距離に変化がみられた 3 年間については詳細に図表化した（図 7）。

オープンガーデン開始年から第 8 回の 1991（平成 5）年まで，1986（昭和 61）年の 840 m を除いて，230～350 m 圏内の誘致距離であることが明らかになった。生活圏内での緑地である街区公園の 250 m，近隣公園の 500 m という誘致距離を参考にすると，第 1 回（1984 年）から第 8 回（1991 年）は町内の居住者が大多数を占めており，来訪者が徒歩によって容易に訪問可能な距離（5 分以内）であるといえる。増加する来訪者は町外からであり，町内からの来訪者は飽和状態で，第 1 回が 53 名，第 17 回が 56 名とほとんど変化がない。

1992（平成 4）年 2 月に配布された“6 丁目「緑のお散歩

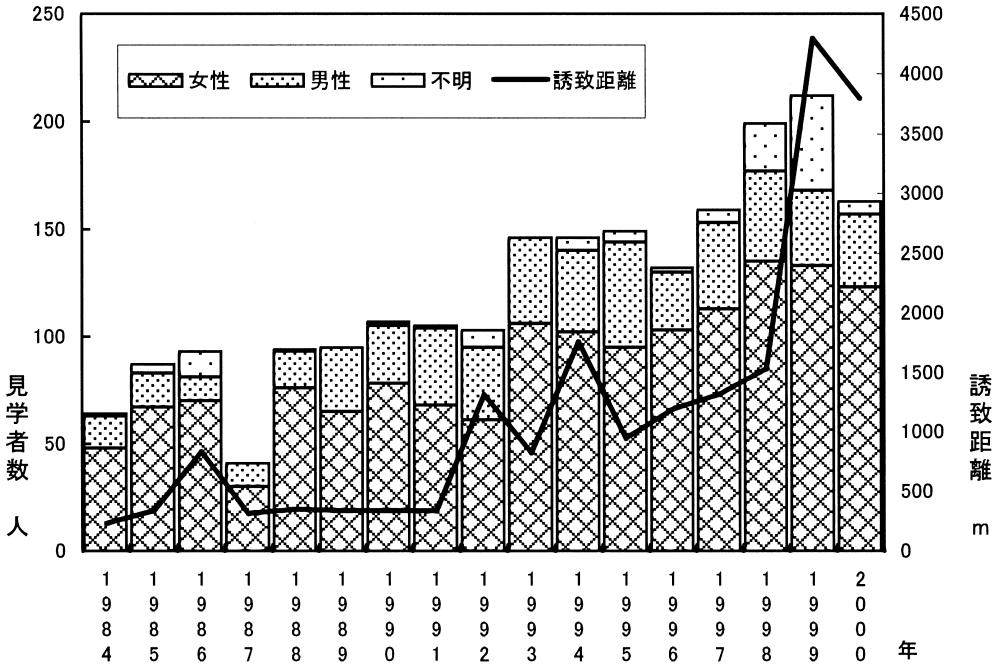

図 6　東京都国分寺市の渡辺邸庭園における来訪者数と誘致距離の変遷

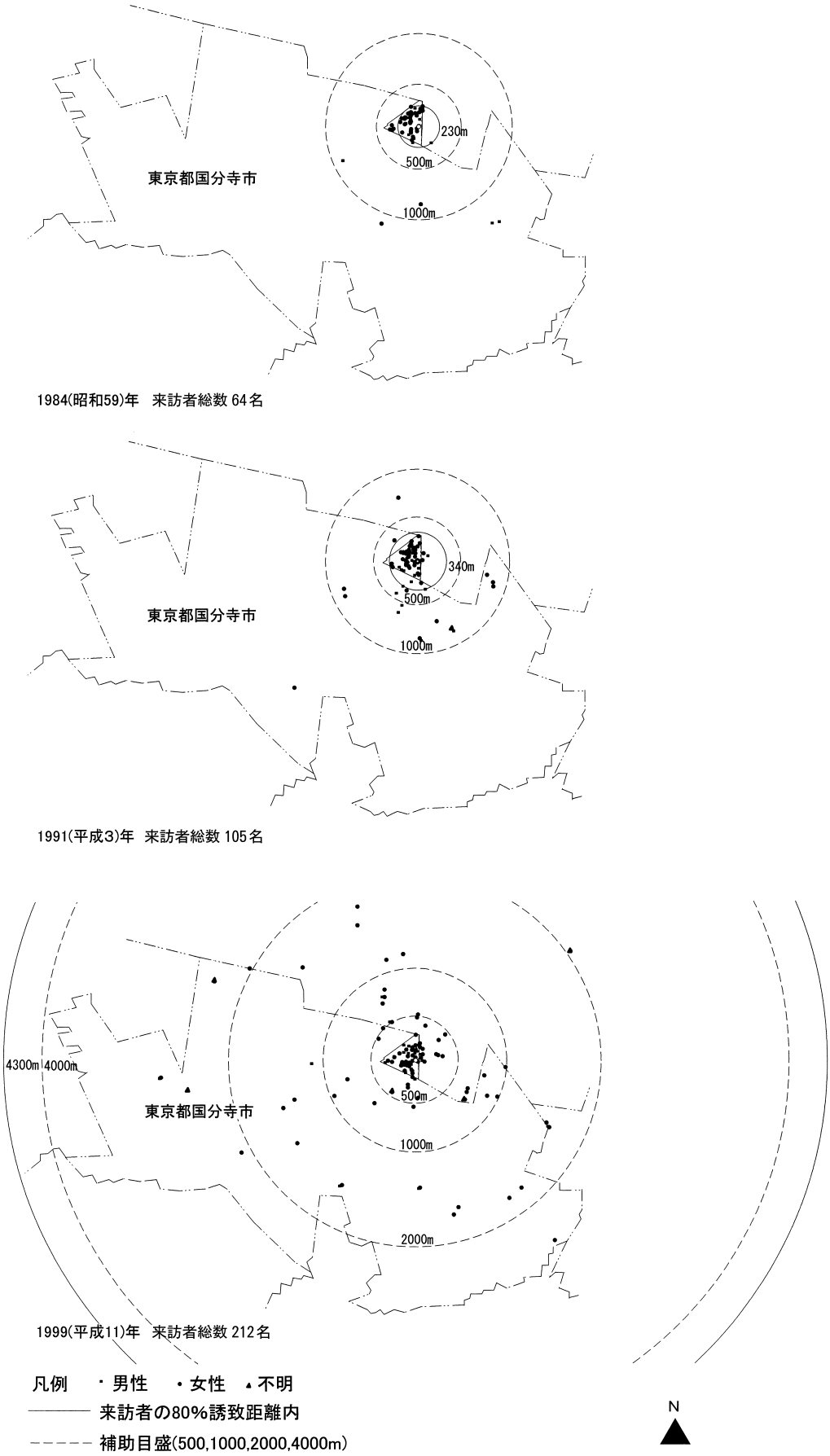

図 7　東京都国分寺市の渡辺邸庭園におけるオープンガーデン開催時の誘致距離の変化

マップ」”は，誘致距離を前年の 340 m から 1,320 m と 4 倍近く拡大させる効果があった。同様に第 11 回，1994（平成 6）年の来訪者数は合計 146 名と前年と同数であるが，誘致距離は 830 m から 1,760 m と 2 倍近くになっている。その理由してオープンガーデン当日の東京新聞に掲載されたことが挙げられる。同年のバラを楽しむ会「反省事項」メモには「東京新聞を読んで遠方から来られた人が何人かいた」とあり，報道によって誘致距離が拡大することが明らかになった。

新聞や雑誌によって誘致距離が拡大した結果，オープンガーデンの開催が地域活動ではなくなる可能性がある。また，誘致距離の拡大と来訪者の増加が密接な関係にあることから，このまま増加傾向が続くと個人庭園の面積では来訪者全てを収容できなくなるだろう。

その反面，誘致距離の拡大により，地域住民によるオープンガーデン活動の評価から，地域を越え交流を通じた評価が可能となる。

7. まとめ

これまでみてきたように，これらの先駆的事例はオープンガーデンという市民の自主的な活動により，我が国においても私的な空間である個人庭園の公共的展開が可能であることを示唆していた。

経済企画庁編発行の『平成 12 年度国民生活白書―ボランティアが深める好縁』[24] では，社会生活を発展段階順に説明し，「血のつながった者が共に生活を営む血縁社会が最初であり，そして，農耕を共にすることによって地縁で結ばれた地縁社会が生まれていった。その後，産業革命を経て，働き手の多くが雇用者として企業に雇われ，職場の縁によって生活のつながりを持つ職縁社会が形成されるようになった」という。しかし「バブル経済を経て，少子高齢化，経済の熟成化，グローバル化を背景に，終身雇用や年功賃金を中心とする雇用慣行が変わりつつあり」，「同好の士が好みの縁で集まるという好縁社会への動きが始まっている」。オープンガーデンは「庭園主」と「来訪者」，もしくは「庭園主」同士がガーデニングという「好縁」によって結ばれ，「『次の時代』の基本的な人間関係を規定する重要な要因となる可能性がある」ボランティア活動，つまり手間暇をかけた庭園を公開する活動によって成立している。

そしてオープンガーデンは自主的な造園空間でのボランティア活動であり，公園愛護会や近年盛んになっている雑木林保全活動と同様に，社会的重要度を増すことであろう。東京都の『緑の東京計画』[25] では，「都民の緑への関心の高まりを，自主的な緑づくりへの取組みにつなげていく仕組みを創って」いくために，都民，企業，NPO と協働し，協力，支援するという。公共への参画（パブリック・インボルブメント）が重要視される現在，「『都民が主役』で築く緑」のためボランティア活動の指導や助言を行なうことができる人材を育成していく基盤を整備，2001 年から 2025 年までに 1,500 名という目標値を掲げている。この点においてオープンガーデンの庭園主は，来訪者との交流を通じて，緑づくりの指導者的役割を果たしていると考えられる。

オープンガーデンの推進のためには，行政の理解も必要である。個人庭園は庭園主とその家族の利用を前提に設計されており，多人数の来訪者が休息するスペースを考慮し設計されていない。渡辺邸庭園では私道に机を配置し，公園内のカフェテリアのような機能を持ったスペースを演出している。毎年一回の開催にもかかわらず渡辺邸庭園は「町内から引越をした人も，バラの咲くオープンガーデンの季節になるとやってくる」[22] 来訪者もいることから，魅力ある「祭り」として地域に定着，ランドスケープ資産としての価値も高いと思われる。このような庭園に対し，行政としても公道や近隣にある公園を，カフェテリアのスペースとして一時使用の許可をするなどの必要があるだろう。

オープンガーデンをより発展させるために，海外の類似事例を挙げると，ニュージーランド，クライストチャーチにおけるガーデンコンテストは，個人庭園のガーデニングによって花のあるまちづくりへと景観を向上させた[26]。ドイツにおける「わが村を美しく」コンクールは，住民意識を高め，参加を促進させることによりアメニティを形成するのに効果があった[27]。英国におけるナショナル・トラストは，都市住民からの会費や寄付を，カントリーサイドの保全に役立てることを目的のひとつにしている。これらはガーデニングから公共性のある空間へ，行政主導から市民参加へ，都市から農村の景観保全へといった方向性を持っている。オープンガーデンの活動は以上のような方向性を考慮し，ただ単に一般市民に公開される個人庭園といったものではなく，社会的意義をもった活動へと目標を持つべきである。我が国の一部のオープンガーデン実施団体はチャリティーといった社会福祉活動を行なっているが，テリトリアル・ガーデンの概念を借りると，身近な緑であるコミュニティー・ガーデンから，広域の緑である農村景観，特に近年話題となっている棚田景観の保全などに寄付をするといった明快な目標があれば，より一層の広域的社会性の担保も可能となる。オープンガーデンは今後の発展によって，新たなアメニティ創出の計画的メニューのひとつとも位置づけられよう。

文献並びに注

1) 鈴木　誠，2000．テリトリアル・ガーデン～所有する庭園から感じ楽しむ庭園へ～，第 3 回日・中・韓　国際ランドスケープ専門家会議 2000，pp. 13–20.
2) 佐々木葉二，2000．庭園から読み解く都市空間，第 3 回日・中・韓　国際ランドスケープ専門家会議 2000，pp. 5–8.
3) 桑子敏雄，2000．個人庭園の境界性と都市空間の意味，第 3 回日・中・韓　国際ランドスケープ専門家会議 2000，pp. 1–4.
4) 野中勝利，2000．現代都市の可能性と展開，第 3 回日・中・韓　国際ランドスケープ専門家会議 2000，pp. 17–20.
5) 進士五十八，1992．アメニティ・デザイン，学芸出版社，pp. 254–255.
6) Aida, A., Hattori, T. and Shinji, I., 2000. Definition of “Open Garden” and Case Studies in Japan, Journal of

The Japanese Institute of Landscape Architecture, International Edition, Vol. 1, pp. 189–190.
7) 佐藤　昌, 1977. 日本公園緑地発達史（上）, 都市計画研究所, pp. 13–14.
8) 小野佐和子, 2000. 六義園に見る安永・天明期の「庭見物」, ランドスケープ研究, 63（5）, 361–366.
9) Garden of England and Wales Open for Charity. 2001. The National Gardens Scheme Charitable Trust, England.
10) 「ガーデニング」が流行語大賞に選ばれたのが 1997（平成 9）年,「現代用語の基礎知識」（2000）によれば,「…庭づくりや植物の手入れのことをガーデニングと称するようになった。この傾向は 1996 年ごろから始まっている…」という.
11) Aida, A., Hattori, T. and Shinji, I., 2000. Aspect of Private Gardens Open to the Public under the National Gardens Scheme in England and Wales, Journal of The Japanese Institute of Landscape Architecture, International Edition, Vol. 1, pp. 9–12.
12) Aida, A., Suzuki, M. and Shinji, I., 2001. Development of Open Garden Society in Japan, 38th IFLA World Congress Proceeding, N1–N10.
13) 川口正英, 1994. 卒寿を記念して, 自費出版.
14) 川口正英, 1981. 懐古と回想, 自費出版.
15) 川口正英, 1986. 白鳳と紫陽花と横浜文化賞, 自費出版.
16) 川口正英, 1979. 白鳳庵のあじさい, 自費出版.
17) 市民グラフ　ヨコハマ, 1990 年 9 月. 市の花・区の花, 花の名所さんぽ, 横浜市市民局広報相談部広報課広報センター, 73, pp. 11–21.
18) 神奈川新聞（1995 年 6 月 25 日, 1996 年 6 月 19 日）, ミニコミ誌・リベルタ（1992 年 6 月 18 日, 1994 年 6 月 23 日, 1995 年 6 月 1 日）, 広報よこはま瀬谷区版　せや（2000 年 6 月）, 瀬谷区制 25 周年記念事業実行委員会　瀬谷区役所発行「水と緑とふれあいの街・瀬谷」（1999 年 10 月）, また天気予報の背景画像として NHK で 1998 年 6 月 16 日放映.
19) 市民グラフ　ヨコハマ（1982 年 12 月, 1990 年 9 月, 1995 年 3 月）.
20) 横浜市区分地図　瀬谷区 1：9,000, 1999. 昭文社.
21) 神奈川新聞, 1995（平成 7）年 6 月 25 日.
22) 東京新聞, 1994（平成 6）年 5 月 22 日.
23) 読売新聞, 1986（昭和 61）年 5 月 29 日.
24) 経済企画庁編, 2000. 平成 12 年度国民生活白書―ボランティアが深める好縁, 大蔵省印刷局.
25) 東京都編, 2000. 緑の東京計画, 東京都.
26) 杉尾邦江, 1998. ニュジーランド・クライストチャーチに於ける私有地緑化（ホームガーデン）の事態調査（その 1）, PREC STUDY REPORT, Vol. 2, pp. 62–69.
27) 武内和彦, 1988.「わが村は美しく」コンクールにみる集落景観の保全・創造を評価する視点, 造園雑誌, 51（5）, 353–358.

The Significance of "Open Garden" in Japan from Pioneering Cases

By

Akira AIDA* and Isoya SHINJI**

(Received February 28, 2001/Accepted July 19, 2001)

Summary : The meaning of "garden" is facing a historical turning point, to become "a space of private garden open to the public". Thus, how the public takes pleasure and enjoyment in private gardens is being discussed at the present time. The gardening boom follows the Open Garden by the National Gardens Scheme in England and Wales, which became well known and 11 Open Garden Societies were established in Japan. The purpose of the research is to consider the meaning of Open Garden and the aim of Open Garden activity which would develop in the future in Japan by considering three pioneering cases, which have been opened to the public since before the gardening boom, and are located in the metropolitan area. The objects of study are Kawaguchi Garden in Yokohama City, Kanagawa (31 years open to the public), Watanabe Garden in Kokubunji City, Tokyo (17 years open to the public), Kawai Garden in Osaka City, Osaka (8 years open to the public).
As a result of studying these pioneering cases, it was suggested to develop private gardens as public space in Japan through the system of Open Gardens which is an independent activity of the citizens. Open Garden will become one of the planning methods to create and develop a new.

Key Words : open garden, The National Gardens Scheme, private garden, gardening boom, community planning

* Department of Agricultual Science, Graduate School of Agriculture, Tokyo University of Agriculture
** Department of Landscape Architecture Science, Faculty of Regional Environment Science, Tokyo University of Agriculture